

平成22年6月28日現在

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007～2009

課題番号：19202029

研究課題名（和文） 滞日アフリカ人の生活戦略と日本社会における多民族共生に関する都市人類学的研究

研究課題名（英文） Urban Anthropology on Life Strategy of African Immigrants and Multi-ethnic symbiosis In Japan

研究代表者

和崎 春日 (WAZAKI HARUKA)

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40230940

研究成果の概要（和文）：

「グローバル化時代における中下層アフリカ人の地球的移動と協力ネットワーク」

現代社会において、グローバリゼーションを生きるのは、北側社会や特別なアフリカ人富裕層だけではなく、「普通の」アフリカ人たちが、親族ネットワーク等を駆使して、地球を広く縦横に生き抜いている姿が、本共同研究から析出された。その事実を基礎にした外交上の政策立案が必用になってくることを、本共同研究は明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

“Global Imi/emigration and co-operative networks of popular middle-lower class Africans”

This research program could succeed in revealing that it is neither limited rich people of northern globe, Europe, US and Japan nor wealthy higher class of African societies, but ordinary popular citizens, or middle-lower class of African societies that got out of their African countries to all over the world including Japan as migrant or moving dynamic merchants living or staying in Japan or other economically developed countries with strong tactics or flexible networks spread in the world.. In terms of our research, diplomatic policy including Japan-Africa relations based on the strong recognition of these so many crucial facts proved by our research should be taken, as is our academic important fruit.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	10,200,000円	3,060,000円	13,260,000円
2008年度	9,200,000円	2,760,000円	11,960,000円
2009年度	7,600,000円	2,280,000円	9,880,000円
年度			
年度			
総計	27,000,000円	8,100,000円	35,100,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学 文化人類学・民俗学

キーワード：都市人類学、エスニシティ、アフリカ人、移民、共生

1. 研究開始当初の背景

この共同研究の前に、この共同研究の基礎研究といえる、3年間の「来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究」という共同研究を推し進めてきていた。その研究成果を基礎として、来住アフリカ人と日本人との共生関係から発展させ、日本社会における多民族共生を探る必要性が強くなってきていた。しかも、日本社会のなかでは、今までのようなヨーロッパ人など「先進国」とされる地域からの来住者だけではなく、歴史の古い交流のある東アジアだけでなく、イラン人やブラジル・ペルー人など、ニューカマーと称される新しい移民層が日本に来住するようになってきていた。オールドカマーとニューカマーが交錯した、日本社会における新しい日本人－アフリカ人－他民族という多民族関係を視野に入れた滞日アフリカ人の生活動態をとらえる必要が生じ、そこから多民族共生モデルを立ち上げる必要が生じていた、という社会背景をもつ。

2. 研究目的

旧共同基礎研究から、日本にいるアフリカ人の生活動態の概略がかなり掴めるようになってきたが、アフリカのどの地域の何人がどのように、日本で競争・共同して生活しているかという、その具体的で詳細な生活戦略を明らかにすることを、まず第1の研究目的とする。日本に滞在するアフリカ人の居住の度合いにより、「来住」「在日」というより「滞日」のアフリカ人の生活動態を捉える必要がある。これを第2の目的とする。その結果、日本人－アフリカ人という2者関係だけでなく、日本における「多民族共生」をどう実現していくかという政策的な研究目的をも有するものである。そのアフリカ人というのも、多国籍、多宗教、多民族からなっており、その違いにまで降りて、どのような多民族の交流関係があるのかを、詳細に研究していくことを第3の研究目的とする。

3. 研究の方法

滞日アフリカ人の生活動態を、日本の3大大都市圏（名古屋圏、京阪神、東京圏）で調査・検証する。雇用機会のありうる商業施設や工業施設が集中している日本の3大大都市圏で、滞日アフリカ人の日本への浸透の度合いを調べていく。

その滞日アフリカ人の居住実態や生活実

態をフィールドワークで明らかにしていく。そのため、研究項目として、居住実態として、都市名、出身国、母語、宗教的背景などを調査する。また、生活実態として、就業、アルバイト、収入、出費、母国への送金、アフリカ人同士の仲間関係、日本人との交流、結婚、日本人妻の会の活動状況、日本NGOの関わり方、余暇の過ごし方等、を調査する。

3大大都市圏での滞日アフリカ人の生活状況の違いやその共通構造を明らかにしていく。そのため、名古屋圏班、京阪神班、東京圏班の3グループを組織する（6研究組織、参照）。

国内調査のより詳細な調査項目としては、①滞日アフリカ人の労働内容、②滞日アフリカ人の困窮と相互扶助、③滞日アフリカ人の日本人との交流実態、④滞日アフリカ人と日本ホスト社会の交流、⑤滞日アフリカ人日本文化習熟度、⑥対日アフリカ人－他の外国人－日本人の間のマルチプルな交流や諸関係、ひいては、日本社会における多民族共生関係を調査・検証する。

海外調査では、滞日アフリカ人人口第1位のナイジェリア人の母村調査、滞日アフリカ人人口第2位のガーナ人の母村調査、英語圏アフリカとフランス語圏アフリカと日本との交流比較もおこなう。同時に、東アフリカから日本への移民・移入と西アフリカから日本への移民・移入との比較考察もおこなう。

4. 研究成果

その結果、研究の内容面では、多くの発見、成果が上がった。

日本において宗教を核にしたアフリカ人の共同の形も見えてきた。より具体的には、モスクでのイスラームを中心とした生活共同、キリスト教教会を核とした生活共同が明らかになってきた。

また同時に、どの都市においても、アフリカの同国人や同民族が集まるアフリカン・レストランやアフリカン・コーヒーショップが果たす情報交換や集会場機能が明らかになった。また、アフリカ人－日本－アフリカという往復関係で、日本－アフリカ関係を捉えていかななくてはならないことも明らかになった。特に、ガーナに帰国した滞日アフリカ人の日本人配偶者を含む家族のファミリー・ヒストリーの収集は、グローバル時代のアフリカ人－日本人の自由な移動動態を示すものとなった。それは、日本で中古自動車・パーツビジネスを展開する滞日アフリカ人の頻

繁なアフリカー日本ーアフリカの往来関係によっても、裏付けられるものとなった。滞日アフリカ人による中古自動車・パーツ業の実態が詳細に明らかになった。カメルーン人中古自動車ディーラーたちは、日本とカメルーンを行ったりきたりする。また同時に、世界のいくつかの土地に家族を配置して、その協力・連絡関係によって、滞日アフリカ人たちが、ビジネスや生存ネットワークを張っている実態を明らかにした。

さらに、アフリカ内部の政治・経済・社会状況との連関で、アフリカ人の滞日・在日生活を考察する、深い研究成果も実ってきた。つまり、アフリカ内部の政治・経済・社会・文化状況と日本と諸外国とをむすぶ複雑な移動・移民実態が明らかになってきた。

したがって、総じて、今やグローバリゼーションを生きるのは、北側社会や特別なアフリカ人富裕層だけではなく、「普通の」アフリカ人たちが、親族ネットワークを駆使して、地球を広く縦横に生き抜いている姿が、本共同研究から析出された。その事実を基礎にした外交上の政策立案が必用になってくることを、本共同研究は明らかにした。

こうした発見を導いた研究成果は、以下の発表論文等による。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 33 件)

- ①川田薫「在住アフリカ人コミュニティへの HIV/AIDS 予防啓発活動の取り組みー市民社会団体によるナイジェリア人同郷団体との協働の道り」『生存学』2、査読有、2010 年、361-373 頁
- ②田中重好「重層的なガバナンスを構想するための覚書」『名古屋大学社会学論集』、査読有、2010 年、21-38 頁
- ③阿久津昌三「アシャンティの伝統的建築物群」『トンボの眼』(「共生」と「文化財保護」のネットワーク構築を目指すコミュニティ誌) 17、査読有、2010 年、7-8 頁
- ④阿久津昌三「帝国と人種ーコンラッド『闇の奥』と人類学の黎明期」『法学研究』(慶応法学研究会) 83-2、査読有、2010 年、327-365 頁
- ⑤和崎春日「アフリカと日本の自他交流から見た異文化理解ー学びあいの構造と双方向の救済」『アフリカにおける天理教の活動』天理大学おやさと研究所、査読有、2010 年、35-43 頁
- ⑥清水貴夫「ワガドゥグにおける染色綿布、ボゴラン Bogolan の制作過程」『名古屋大学人文科学研究』38、査読有、2009 年、133-144 頁

- ⑦田淵六郎「離家とその規定要因：日本・ドイツ・イタリアの比較を通じて」『人口問題研究』65-2、査読有、2009 年、28-44 頁
- ⑧望月克哉「書評・松本尚之著『アフリカの王を生み出す人々ーポスト植民地時代の「首長位の復活」と非集権社会』」『アフリカ研究』75、査読有、2009 年、58-61
- ⑨坂井信三「歴史の叙述と社会の記述ー社会人類学における歴史的な人格の位置づけをめぐって」『社会人類学年報』35、査読有、2009、1-31 頁
- ⑩松田素二「構造的弱者と共同性ー京都市在住朝鮮人のライフヒストリー調査から考えるー」グローカル研究叢書『グローカル化現象のなかの共同体/共同体の生成：グローカル化を飼い慣らす』成城大学民俗学研究所グローカル研究センター、査読有、2009 年、3-21 頁
- ⑪望月克哉「アフリカン・ピア・レビュー・メカニズム (APRM) の現状と課題」『国際完全保証における地域メカニズムの新展開』(調査研究報告書 望月克哉編、アジア経済研究所)、査読有、2009 年、75-86 頁
- ⑫川田薫「盛り場「六本木」におけるアフリカ出身就労者の生活実践ー快適な空間のためのコミュニティへの道り」『地域研究』(9) 1、査読有、2009 年、179-190 頁
- ⑬松田素二「暴力の舞台としてのストリートー2007-8 年ケニア・ポスト選挙暴動を事例としてー」『ストリートの人類学』国立民族学博物館研究紀要、査読有、2009 年、385-406 頁
- ⑭松田素二「序 現代世界における人類学の課題」『文化人類学』日本文化人類学会、査読有、2009 年、262-271 頁
- ⑮望月克哉「ナイジェリアの主食とその来歴」『アジ研ワールドトレンド』161、査読有、2009 年、20-21 頁
- ⑯和崎春日「中古自動車業を生きる滞日アフリカ人の生活動態ーカメルーン人の生活戦略と母国の政治社会状況」『地域研究』(9) 1、査読有、2009 年、260-279 頁
- ⑰和崎春日「滞日アフリカ人のアソシエーション設立行動と集会行動」『名古屋大学文学部研究論集 史学』54、査読有、2008 年、1-20 頁
- ⑱鈴木裕之「近代都市アビジャンの若者文化：マス・メディア情報を取りこむストリート・ボーイたち」『朝倉世界地理講座：大地と人間の物語 11：アフリカⅡ』、査読有、2008、749-760 頁
- ⑲鈴木裕之「日本に生きるアフリカミュージシャン：その経歴と活動」『ら移住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』、査読有、2008 年、61-82 頁
- ⑳三島禎子「あるソニンケ商人の人生ーアフ

リカからアジアへ』『来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』、査読有、2008年、I-12頁

②松本尚之「アフリカにおける多文化主義政策の現状と課題—多様性の『承認』と『管理』のはざま—」『東洋大学国際強制社会研究センター平成19年度研究報告書』、査読有、2008年、59-62頁

③松本尚之「来住ナイジェリア人の同郷団体を通じた相互扶助—国内移住と比較を中心に—」『来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』、査読有、2008年、35-50頁

④望月克哉「財政運営を問われる資源大国—ナイジェリア」『外交フォーラム』239、査読有、2008年、40-43頁

⑤清水貴夫「日本社会における「アフリカ人—アフリカ人」関係の生成過程—六本木・在日教会の事例から—」『来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』、査読有、2008年、135-144頁

⑥松田素二「複数化する身体—現代ケアのムンギギ・セクトを事例として」『身体資源の人類学』（菅原和孝編）、査読有、2007年、231-259頁

⑦松田素二「21世紀世界におけるアフリカの位置—アフリカに学ぶ、社会を癒す知恵」『2010年代、世界の不安、日本の課題』（松原正毅編）、査読有、2007年、477-494頁

⑧松田素二「グローバル化時代の人文学—アフリカからの挑戦」『グローバル化時代の人文学対話と寛容の知を求めて』、査読有、2007年、118-145頁

⑨望月克哉「ナイジェリアの首都移転—人工都市アブジャをめぐる試練」『アジアワールドトレンド』、査読有、2007年7月号、2007年、24-27頁

⑩鈴木裕之「ギニアの国家建設：セク・トゥレによるユニークな文化政策」『朝倉世界地理講座：大地と人間の物語Ⅱ：アフリカⅠ』、査読有、2007年、351-361頁

⑪三島禎子「ソニンケ商人の歴史—砂漠を超え海を渡る人びと—」『朝倉世界地理講座：大地と人間の物語Ⅱ：アフリカⅠ』、査読有、2007年、286-300頁

⑫三島禎子「人はなぜ移動するのか—科学研究費補助金による研究：アフリカとユーラシアに展開する宗教と商業のネットワークに関する歴史人類学的研究」『民博通信』118、査読有、2007年、20-21頁

⑬松本尚之「現代ナイジェリアにおける祭りの政治性—新しい地域社会の形成とその文化の担い手たち」『東北人類学論壇』71、査読有、2007年、I-22頁

⑭川田薫「在日アフリカ人コミュニティへのHIV/AIDS予防啓発活動に取り組んで」『アフリカNOW』85、査読有、2007年、7-11頁

〔学会発表〕（計10件）

①松田素二 Local Community and Environmental Conservation: Think globally, Act locally reconsidered', Community of Becoming in Mainland South East Asia, 2010.March.7, Chiang Mai University,

②川田薫「在日外国人の生存権と治療アクセス」第23回日本エイズ学会学術集会、2009.11.28、白鳥ホール

③高村美也子「Mixed with Islam and Custom-case of Bondei People Wedding in Tanzania イスラームと慣習の併合—タンザニア、ボンデイ族の結婚式の事例から」アジア・アフリカ学術基盤形成事業第1回国際ワークショップ、2009.10.10、名古屋大学

④川田薫「在日アフリカ人のHIV/AIDS予防啓発からHIV陽性者支援の取り組み」第24回国際保健医療学会、2009.8.5、東北大学

⑤田中重好「グローバルイゼーションと東アジアの公共観の変貌」東アジア研究所第24回学術大会、2009.6.27、慶応大学

⑥清水貴夫「ストリートの少年たちとNGO—ブルキナファソ・ワガドゥグにおける青少年の生活とKEOGOの支援活動の事例」日本アフリカ学会第46回学術大会、2009.5.24、東京農業大学

⑦和崎春日「在日アフリカ人の生活動態—滞日カメルーン人の生活戦術：中古自動車業をめぐる生活動態」日本アフリカ学会第45回学術大会、2008.5.25、龍谷大学

⑧鈴木裕之「来住アフリカ人ミュージシャンの来歴と活動状況」日本アフリカ学会第45回学術大会、2008.5.25、龍谷大学

⑨松本尚之「在日アフリカ人の祭りに見る相互扶助」日本アフリカ学会第45回学術大会、2008.5.25、龍谷大学

⑩川田薫「六本木サービス業に従事した在日ナイジェリア人の生活実情の比較検討2001-2008」日本アフリカ学会第45回学術大会、2008.5.25、龍谷大学

〔図書〕（計15件）

①佐々木重洋「音声の優越する世界—仮面結社の階梯と秘密のテキスト形態—」木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』京都大学学術出版会、2010年、329-345頁

②三島禎子「セネガル・モーリタニア紛争—出来事から紛争への変貌」小川了編著『セネガルとカーボベルテを知るための60章（エリア・スタディーズ78）』明石書店、2010年、107-110頁

③三島禎子「アフリカとヨーロッパの壁—国を「脱出する」人びと」小川了編著『セネガルとカーボベルテを知るための60章（エリ

ア・スタディーズ 78)』明石書店、2010年、132-135頁

④和崎春日「倉石都市民俗の継承と展開—都市の伝承母体論と都鄙連続体論・都鄙区画論をめぐる理論化」『民俗文化の探求』岩田書院、2010年、252-275頁

⑤松田素二「反人種主義という困難—『人種と歴史』を読み直す」『KAWADW道の手帖 レヴィ=ストロース 入門のために 神話の彼方へ』河出書房新社、2010年、135-139頁

⑥望月克哉「ナイジェリアにおける石油産業の展開と産油地域開発住民の運動」坂口編『途上国石油産業の政治経済分析』2010年、175-200頁

⑦松田素二『日常人類学宣言！生活世界の深層へ/から』世界思想社、2009年、343頁

⑧松田素二「平和のフェティシズム考：文化的フェティシズム批判を超えて」『フェティシズム論の系譜と展望』京大出版、2009年、377頁

⑨三島禎子「中国とアフリカの近い関係」国立民族学博物館『旅 いろいろ地球人』淡交社、2009年、169頁

⑩鈴木裕之「ストリートで生成するスラング：コート・ジボワール、アビジャンの都市言語」梶茂樹・砂野幸稔編『アフリカのことばと社会：多言語状況を生きるということ』三元社、2009年、161-187頁

⑪ MOCHIZUKI Katsuya “Opposition movements and the youth in Nigeria’s oil-producing area: an inquiry into framing,” in Shigetomi & Makino eds., *Protest and Social Movements in the Developing World*, Cheltenham: Edward Elgar, 2009, 206-224.

⑫田淵六郎「形態としての家族・意識としての家族」神原文子・杉井潤子・竹田美和編『よくわかる現代家族』2009年、12-13頁

⑬和崎春日（編著）『来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』2008年、157頁

⑭松本尚之『アフリカの王を生み出す人々—ポスト植民地時代の「首長位の復活」と非集権社会』明石書店、2008年、324頁

⑮望月克哉（編）『開発と社会運動—先行研究の検討』アジア経済研究所、2007年、159頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和崎 春日 (WAZAKI HARUKA)
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：40230940

(2) 研究分担者

上田 富士子 (UEDA FUJIKO)
京都文教大学・人間学部・教授

研究者番号：70213361
(H20～21年度：連携研究者)

坂井 信三 (SAKAI SHINZO)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：00140012
(H20～21年度：連携研究者)

田中 重好 (TANAKA SHIGEYOSHI)
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：50155131
(H20～21年度：連携研究者)

松田 素二 (MATSUDA MOTOJI)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：50173852
(H20～21年度：連携研究者)

阿久津 昌三 (AKUTSU SHOZO)
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：30201883
(H20～21年度：連携研究者)

三島 禎子 (MISHIMA TEIKO)
国立民族学博物館・民族社会研究部・准教授
研究者番号：20280604
(H20～21年度：連携研究者)

鈴木 裕之 (SUZUKI HIROYUKI)
国土館大学・法学部・教授
研究者番号：20276447
(H20～21年度：連携研究者)

若林 チヒロ (WAKABAYASHI CHIHIRO)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師
研究者番号：40315718
(H20～21年度：連携研究者)

佐々木 重洋 (SASAKI SHIGEHIRO)
名古屋大学・文学研究科・准教授
研究者番号：00293275
(H20～21年度：連携研究者)

田淵 六郎 (TABUCHI ROKURO)
上智大学・総合人間科学部・准教授
研究者番号：20285076
(H20～21年度：連携研究者)

松本 尚之 (MATSUMOTO HISASHI)
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：80361054
(H20～21年度：連携研究者)

望月 克哉 (MOCHIZUKI KATSUYA)
日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究支援部・部長
研究者番号：30450456
(H20～21年度：連携研究者)

研究者番号：30450456
(H20～21年度：連携研究者)